FRONT
OF
VIEW

規制とライフデザイン

●

第一生命経済研究所　顧問
大森　泰人

正規雇用と非正規雇用の格差が問題視されても、政府が規制によって是正するのは難しいと考えられてきた。民間は平時なら規制の負担を避けようと、政府の裏をかくインセンティブを持つ。企業が５年間非正規で雇ったら正規に転換しなければならない法律を作っても、５年でクビにされるだけと自由主義の経済学者は冷笑した。それがこのところ、雲行きが変わってきたらしい。

来年の雇用転換期限を控え大半の企業は、待遇を含め正規化するか、少なくとも無期化する構えで検討している。直截で力技みたいな規制の意図が、マクロの人手不足のために実現に向かう。パートで短時間働く主婦の社会保険料免除も、適用の収入上限を下げれば、免除特権を守るべく働く時間を減らすと考えられた。大企業から試行してみると、こちらも経済学者の予想に反し、収入上限引下げを契機にパート主婦は免除特権を捨て、働く時間を増やしている。日本経済は、働く女性や高齢者が数として増えるだけでなく、時間も増やさねばならない局面に入った。「非正規が増えても、正規のほうが多い以上、多数決だから格差是正は困難」とする常識がくつがえりつつある。

このように規制を設計する際は、規制される側のインセンティブにマクロ経済の動向が及ぼす影響まで考えねばならないが、人間の限られた能力で事前に予測するのは容易でない。長らく大蔵省の金融行政は需給調整の前提に立ち、新規参入を認めず競争させないことによって潰さない、潰さないことによって預金者や保険契約者や投資家を守る構えを続けてきた。バブル崩壊後は日本型システムへの自信が揺らぎ、アメリカを見習って民間により自由に競争してもらうほうが国民の厚生が高まって望まし

いとの判断に傾き、ビッグバンと呼ぶ一連の自由化を行った。だが、地価と株価の二重バブル崩壊の傷跡は深く、新規参入が増えて国民の選択肢が増え厚生が高まったとは必ずしも言えない。もとより自由化は恩恵だけでなく、国民をよりリスクにさらす可能性もある。昨年初め、スキー場に向かう大学生が多く亡くなった軽井沢のバス事故に対してメディアは、零細なツアー企業の運転手が高齢で経験不足で非正規雇用だったと批判した。運送業の規制緩和で新規参入が増え、適格性に乏しい業者が参入した可能性は否めない。だが同時に、１万円ちょっとで丸２日スキーを楽しめるから、貧しい大学生にも参加のインセンティブが生まれた。事業主体を限り、運転手が若く経験豊富で正規雇用でなければならない規制なら、新たな需要を生む安いツアーは提供できない。

このように規制の設計には、次元が違う価値観の比較も必要になる。働く前段階の大学教育の分野も金融規制に影響され、需給調整で新設を抑制するより要件を満たせば参入を認め、自由に競争してもらうほうが学生の厚生が高まって望ましいと判断した。金融と違い大学の参入意欲も若者やその親の進学意欲も旺盛だったから、進学率は上がる。その結果、非正規雇用にしか就けない大学を出て、奨学金返済に苦しむ若者が増えたが、だから大学を増やさないほうが良かったとも言えない。学問の意味やミクロの人生への恩恵やマクロの経済への影響をどう考えるか、やはり次元が違う価値観による多様な主張があり得る。

ライフデザインを構成するさまざまな分野で、規制の構造はかなり共通している。生まれてしばらく育児の対象になり、教育の期間を経て働き始め、結婚したりしなかったり、子供や住宅を持ったり持たなかったりして、やがて労働市場から退出し余生に至る。その過程で、医療、育児、教育、労働、住宅、介護、年金、税制、金融などさまざまな規制との相互作用を経験する。かつて金融規制の設計に携わった目で私は今、ライフデザインという人生の設計を眺めている。経験上、行政官は、経済学をさほど信じていないが、それに代わる確固とした判断基準を持つ訳でもない。政治との関係を含め、時々の空気に流されて場当たりに対応してきたかもしれない。行政官を退いた今、自らの経験にこだわらずライフデザインを構成する分野を横断的・包括的に勉強し直し、規制を受ける側のインセンティブにマクロ経済の動向がどう影響し、次元が違う価値観をどう比較するのが国民にとって望ましいかを考えられないか、そして、自分なりの「規制とライフデザイン論」を構想できないかな、とほのかな希望を抱いている。